



日本音楽教育学会ニュースレター 第87号

目次

1 学会からのお知らせ

- | | | |
|------------------------------------|-------|---|
| 1. 第24期を振り返って..... | 今川 恭子 | 2 |
| | 本多佐保美 | 3 |
| | 木村 充子 | 3 |
| 2. 日本音楽教育学会第53回大会の予告..... | 津田 正之 | 4 |
| 3. 編集委員会からのお知らせとご挨拶..... | 小川 容子 | 4 |
| 4. 教科教育学コンソーシアム第2回シンポジウムのお知らせ..... | 菅 裕 | 5 |
| 5. 『音楽教育研究ハンドブック』の活用(その3)..... | 齊藤 忠彦 | 6 |
| | 本多佐保美 | 6 |
| | 菅 裕 | 7 |
| | 加藤富美子 | 7 |

2 音楽教育の窓

- | | | |
|------------------------------|-------|---|
| 1. 〈連載〉音楽・教育・学校(28) | | |
| 学校で日本音楽を学ぶこと―「口唱歌」によせて―..... | 澤田 篤子 | 8 |

3 会員の声

- | | | |
|----------------------------|-------|----|
| 1. インド音楽の教材化に向けて..... | 松下 行馬 | 9 |
| 2. コロナ禍の教員養成課程で気づいたこと..... | 水谷いつみ | 10 |

4 会員の新聞・近刊等紹介..... 11

5 報告

- | | |
|--|----|
| 1. 2021年度 日本音楽教育学会 第4回常任理事会・新旧合同常任理事会..... | 12 |
|--|----|

6 事務局より..... 18

[編集後記]

1 学会からのお知らせ

1. 第24期を振り返って

2020-2021 年度会長 今川 恭子

2018年4月から2期4年間にわたって会長を務めさせていただきました。お支えくださったすべての方々にこの場を借りて心からの御礼を申し上げます。

学会設立51年目からのスタートとなった第24期は、新型コロナウイルス感染拡大と並走する2年間でした。音楽教育実践と研究の多様な場に関わる会員の皆さまは、困難の中であらためて人と人が「いま・ここ」で響き合っつながり合うことの大切さを強く感じておられることでしょうか。今期の始まりにあたって発行されたニュースレター (No.80) を振り返ると、次のようなことを書いていました。

収束の見通しが不透明な中で、この事態が社会の変革の契機になるのだとしたら、どのような状況にせよ私たちは前を向いて行かねばなりません。「音楽の学びと教え」の「これから」を考えるという、私たちに課せられた課題は重大であると考えます。いま目の前にある問題に対処することももちろん必要ですし、今だからこそその本質を見据えた議論の場を確保することも大事にしたいと思います。

少し気負っていたかとも思いますが、しかしこの思いをもって奮闘した2年間であったことは間違いありません。2年間共に奮闘し、支えてくださった役員、委員の皆さま、そして会員の皆さまには重ねて感謝申し上げます。

2回の年次大会はいずれもオンライン開催でした。急遽オンライン開催になった第51回大会、オンラインの可能性を追求した第52回大会の実行委員会には数々の新しい試みにチャレンジしていただくことになりましたが、スムーズな大会運営のもとでの活発な研究交流実現は、本学会の底力を感じさせるものでした。学会誌、ニュースレター、地区例会、ゼミナールとワークショップなどなど、学会として果たすべき役割を関係者全員が力を合わせて果たし続けながら、従来壁だと思われていた壁を乗り越えて前進する力を皆が共有できたのではないかと、誇らしく思っております。2021年9月に APSMER をオンライン開催したことは、今後先行き不透明な状況が続いたとしても、私たちがボーダーを越えてグローバルな研究交流を絶やさないという決意を示し、道筋を見出すものでした。

第23期、24期を通して掲げてきた「多様性を尊重した研究と実践およびその交流の推進」「学会の社会的役割を自覚した活動の充実」「学際的研究の推進」という課題は、いずれも「ゴールに到達して終わり」というものではなく、これからも心の中に掲げていくことになるでしょう。新しい時代には新しい課題も現れるに違いありません。社会全体が未来への期待と不安を抱く中、マクロな社会から見れば本学会の存在は小さなものかもしれませんが、学問と文化、芸術の意義と価値を実践・研究両面で支え発信していく役割の重要性は言うまでもないと信じます。学会として今後もこの役割を果たしていくうえで、組織・運営面での体制強化も大きな課題です。あらゆる世代に活躍していただくための制度改革や業務の電子化などの取り組みは一定の成果をあげていますが、道半ばの仕事も多く、諸課題を次期に引き継いでいくことになります。どうぞよろしく願いいたします。

学会のさらなる発展と、学会員の皆さまのご多幸、ご活躍をお祈りしながら、バトン次期会長にお渡しいたします。皆さま、4年間本当にありがとうございました。

第24期の2年間は、まさにコロナとともにあった2年間でした。着任早々、予定されていた京都大会はいったん返上、オンライン大会を本部主導で開催することとなり、急ごしらえの大会実行委員会の一員として、初めてのWeb大会のあり方を模索しました。ちょうど、大学の授業も対面授業が全面禁止となり、動画を作成してネット上にアップしたり、Zoomを用いての双方向のゼミを行うなどの取り組みをしていた時期でした。何事も初めてのことばかりではありましたが、パンデミックの大変な状況の中でも、いかに最大限できることをするかを考えて進めるのは、ある面ではとても楽しくわくわくすることでもありました。

2年目は9月に開催されたAPSMER 2021 東京大会の成功に向けて、全力を傾けました。これは、副会長としてということではなかったのですが、2009年のAPSMER 上海大会以降、毎回欠かさず出席してきたAPSMER、その中で出会いもあり、研究のネットワークも生まれたAPSMERの日本開催ということで、これまでの恩返しをしたいと思い全力で取り組みました。こちら、初めてのオンラインでの国際学会で、準備や、発表者・参加者への日々の細々とした対応など、本当に大変でしたが、終わった今となっては、やり切った爽快感が残ります。

コロナ禍での学会運営は、新しい学会のあり方をおのずと指し示すこととなりました。ペーパーレス化とネット上での様々な事務処理は着々と進み、この10年ほど、持続可能な学会をめざして進めてきた学会のあり方の変化が、コロナをきっかけとしてより促進され、加速度的に進んだように思います。国内的にも国際的にも、音楽教育の学術交流が途切れることなく続いていくことこそが、学会のプラットフォームとしての役割だと思います。今後も、スムーズな学会運営が進められていくことを願いつつ、多くの方々のご尽力に感謝して、退任のご挨拶とさせていただきます。

.....

2020年春、事務局長としてのスタートは、まさにコロナ禍のはじまりと重なりました。第51回大会は、本部を中心とした実行委員会組織を編成し、オンラインにて開催されることとなり、ここから怒涛の日々が始まりました。前例のない事柄の連続でした。しかし、いかなる厳しい状況においても常に学会としてのよりよい在り方を探求し続けてくださる今川会長と本多副会長の姿に大いに励まされ、微力ながらどうにか事務局長の任務を遂行することができました。事務局の4名のスタッフの皆様には、コロナ禍の影響により対応の難しい事態が数々生じたにもかかわらず、いつも迅速に献身的にお仕事をしていただき、助けていただきました。常任理事、理事の皆様、大会実行委員の皆様はじめ、学会運営にかかわる多くの方々に、たくさんお世話になりました。

人々が安心して集うことができないこの状況が非常に嘆かわしいことは言うまでもありません。しかし、嘆いて立ち止まってばかりいたわけではありません。事務局運営の面では、図らずも、この状況下ゆえ、かねてより課題であった業務の電子化を推進し得たともいえます。

本学会が、こんなにも多くの方々の熱く温かな想いによって支えられ、脈々と受け継がれてきたのだということを、身をもって知った2年間でした。お支えいただきましたすべての皆さまに心より感謝申し上げます。今後とも、事務局へのご理解とご協力を賜りますよう、よろしく願いいたします。

2. 日本音楽教育学会第53回大会の予告

大会実行委員会委員長 津田 正之

日 時：2022年11月5日（土）、6日（日）

場 所：国立音楽大学 玉川上水駅（西武拝島線、多摩都市モノレール）徒歩7分

第53回大会は、国立音楽大学で開催されることになりました。本大学での開催は2008年（第38回大会）以来、14年ぶりとなります。昨年12月に第1回の実行委員会を開催し、開催に向けての準備をスタートさせたところです。大会実行委員会のテーマはまだ確定していませんが、開催校の特色を生かし、国立音楽大学ジャズ専修教授の池田篤氏と池田氏の仲間によるジャズの演奏、それを踏まえた座談会を行う方向で、内容の検討を進めているところです。実行委員一同、音楽教育の実践と研究の充実につながる、意味のある大会になるよう、運営面を含めて力を尽くしてまいります。

開催方法については、コロナ禍の状況をみながら判断することになりますが、現時点では、しっかりと感染対策を講じながら、2年ぶりとなる対面での開催を予定しております。11月初旬は国立音楽大学のキャンパスの銀杏の木が美しい季節、たくさんの皆様のご参加をお待ちしております。

3. 編集委員会からのお知らせとご挨拶

編集委員長 小川 容子

第24期最後の編集委員会（2021年度第4回、2022年2月20日）もオンライン開催での実施となりました。『音楽教育学』に投稿された研究論文5本のうち2本が再査読、3本が不採択、研究動向1本は採択、再査読2本のうち2本とも採択となりました。

私は、このニューズレターが発行される2022年3月をもって任期満了となります。2年間にわたって務めてまいりました編集委員長を退任いたしますので、この場を借りて御礼を申し上げます。

委員長を拝命してから一度も対面会議を開くことができませんでしたが、オンライン会議を通して、一つひとつの論文について真摯に且つ慎重に審議を重ねました。今田副委員長をはじめ11名の編集委員の先生方、事務局の若尾様には多大なるご尽力を賜りました。膨大な時間をかけて、気の遠くなるような緻密な作業を懇切丁寧に進めていただきました。査読依頼や執筆依頼に快く応じてくださった諸先生方にも、改めて御礼申し上げます。そしてもちろん、投稿していただいた会員の皆様にも、心より感謝申し上げます。長い通知文を受け取って、修正論文や再投稿論文を作成されるのに苦労したり、残念ながら投稿を断念されたり、あるいは掲載に至らなかった方々もおられることでしょう。でも、たとえ厳しい結果であったとしても、どうか再チャレンジをしてください。査読意見を参考に、ブラッシュアップを目指してください。これまで投稿を敬遠されてきた博士課程在籍の皆様も、思い切って挑戦をしてください。多少荒削りであっても、面白い論文はいつか必ず掲載されるはずです。皆様の御原稿を、今度は一読者として拝読することを楽しみにしております。これまで、本当にありがとうございました。

4. 教科教育学コンソーシアム第2回シンポジウムのお知らせ

教科教育学コンソーシアム理事（会長特命） 菅 裕

教科教育学コンソーシアムでは、現在理事会を中心に委員会組織とそれに関連する規程の整備を進めています。日本音楽教育学会からは新たに次の各会員が選出されました。

研究推進委員：伊藤 真（広島大学）・小川 容子（岡山大学）

編集委員：高橋 雅子（山口大学）

また下記の通り、教科教育学コンソーシアム第2回シンポジウム開催についてご報告します。本学会からは笹野恵理子会員（立命館大学）が提案者として登壇されます。

記

主 題： 教育課程の基準（学習指導要領）を教科教育学としていかに分析・評価するか

大会趣旨： 第1回シンポジウムでは、教科教育学の存立基盤と今後の展望について討論した。第2回シンポジウムでは、教科教育学の立場から教育課程の基準（学習指導要領）をどのように分析し、評価するかについて討論する。教科から見て、教育課程の基準はどうあるべきか、どのような視点と方法で評価可能か、その結果をどう生かすかなど、学習指導要領を一步引いたところから考察の対象としたい。

日 時： 2022年3月13日（日）14:30～17:00

場 所 等： オンライン会議ズームを使用

次 第： 1. 開会のことば

深澤 清治（教科教育学コンソーシアム代表理事）

2. 討論

(1) 趣旨説明

清水 美憲（筑波大学）

(2) 提案

笹野 恵理子（立命館大学）

西村 圭一（東京学芸大学）

柳沼 良太（岐阜大学）

(3) 指定討論

淵上 孝（文部科学省・大臣官房審議官（初等中等教育局担当））

中垣 眞紀（ベネッセ教育総合研究所・主任研究員）

(4) 総合討論・質疑

3. 閉会のことば

深澤 清治（教科教育学コンソーシアム代表理事）

以上

5. 『音楽教育研究ハンドブック』の活用（その3）—常任編集委員より ②—

学部生ゼミでの活用

齊藤 忠彦（信州大学）

本学部に大学院修士課程が存続していたら、大学院の授業で本書をテキストとして扱いたいと考えていたのですが、教職大学院に完全に移行してしまったため、そのチャンスがなくなってしまいました。しかしながら、学部生ゼミでも扱うことができるのではないかと考え、昨年度から音楽教育研究室ゼミで、テキストとして活用しています。

以前の卒論指導は、学生がそれぞれにテーマを決めて、そのテーマに関わる先行研究を調べるところからスタートしていたのですが、本書を扱うことにより、テーマを探し出す場面から丁寧に指導することができるようになりました。本書に掲載されている様々なテーマに触れることができるので、音楽教育に関わる研究の範囲やその視野を広げることにつながります。すべてのテーマが2ページで構成されているため、限られた時間の中で複数のテーマに目を向けることができるというメリットもあります。さらに、本書には、それぞれのテーマに関わる関連する引用・参考文献が記されています。

一例ですが、「音楽の生涯教育の理論」（杉江淑子執筆）を読んだある学生は、本文に記されていた「市民による文化活動の場としての音楽祭の意義を論じた論文」に関心を示し、「引用・参考文献」で紹介されていた元の論文を辿りました。そこに記されていた内容が地元（長野県松本市）で開催されている「サイトウキネン・フェスティバル」に関わることであることを知り、より関心を高めたようです。

以上、簡単ではありますが、本書は、学部生ゼミでも有効に活用することができるという事例を紹介いたしました。

音楽教育研究の議論の出発点として

本多 佐保美（千葉大学）

担当する大学院修士課程の授業「音楽教育学概論」にて、昨年度から『音楽教育研究ハンドブック』を教科書として使っている。授業は、音楽教育研究の分野と方法について概観し、院生各自の問題意識に基づく研究テーマがその中でどう位置付くかを知ること、また音楽教育研究の進め方について具体的・基礎的な知識を得ることをねらいとして進めている。院生が各自の問題関心から、気になるトピックのページを選び、その概要をまとめ考察を加えたレジュメを、参加者全員が共有し議論をする。今年度、院生が選んできたトピックは、例えば、「人はなぜ歌うのか」（今川恭子執筆）、「音楽を聴くこと」（阪井恵執筆）、「音楽を奏でること」（山中和佳子執筆）、「社会集団と音楽教育」（有本真紀執筆）等、たまたまだが、どれも人が音楽をすることについての根源的な問いから出発するトピックだった。私はこの本の常任編集委員として編集に関わり、原稿について広く目を通してきつつもりだったが、あらためて院生たちの選んできたトピックのページを読み、この項目でこういうことが書かれていたのか、と目を開かれることも多く、自分自身、音楽教育の研究に対する視野が広がっていく感じを味わい、とても楽しんでいる。文末にたくさん掲載された参考・引用文献を検索すると、また新たな視野が開けてくる。院生の素朴な疑問から、思わぬ議論の展開があったりして、意見が活発に交わされるのも嬉しいことだ。ハンドブックの読み解きとそこから発する議論をきっかけとして、音楽教育研究の豊かな広がりや若い研究者一人ひとりが実感し、自身の研究に役立ててほしいと切に願っている。

ハンドブックのおすすめの使い方:はじめて音楽教育研究に取り組む人へ

菅 裕 (宮崎大学)

一読者として音楽教育研究ハンドブック全体をあらためて読み通してみると、音楽教育研究領域の広大さに目がくらみます。哲学・社会・歴史・心理・学校・政治など、音楽と関わりながら広がる世界はまるで大海のようです。

卒業論文研究など、これから初めて音楽教育研究に取り掛かろうしている人には、まず第2部第1章「音楽教育研究の計画の立て方」を読むことをおすすめします。ここはいわば大海に漕ぎ出すための羅針盤セクションです。そのあとは、興味を持ってそうなページをパラパラとブラウジングしてください。他の本を読んだり授業を聞いたりしているなかで気になる言葉があれば索引を使うのもよいでしょう。開いたページには、その分野でこれまでに分かっていることが簡潔にまとめられています。思わず「納得!」と叫びたいところですが、ちょっと立ち止まって考えてみましょう。「本当にそうなの?」「状況が違えば結果が変わるんじゃないの?」、そんな素朴な疑問を大切にしてください。見開きページの右隅には参考文献が挙げられていますから、興味を持ったらぜひそちらも読んでください。ここで76頁「文献研究の基本」をもう一度おさらいしましょう。PCでもノートやカードでもよいので、自分なりのデータベースを作るとよいと思います。素朴な疑問がふくらんできたら82頁からの「研究の手法を知る」で自分の疑問に答えをくれそうな研究手法を探してください。そこに挙げられている研究事例を取り寄せて、事前の手続きや必要な道具などどんな準備が必要か確認しましょう。ここまで来たらあとは漕ぎ出すのみ。ハンドブックがみなさんの航海を支える海図となれば、編集に携わったものとしてこんなにうれしいことはありません。

『音楽教育研究ハンドブック』活用の拡がりに向けて

『音楽教育研究ハンドブック』編集委員会委員長 加藤 富美子

本学会設立50周年記念出版『音楽教育研究ハンドブック』の活用の拡がりを目指して、「ニュースレター」83号、85号、そしてこの87号と3回にわたり、活用のポイントを掲載してきました。85号、87号では、『ハンドブック』の第1部～第3部の編集責任を担った常任編集委員から、編集の意図を示すとともに、実際に大学・大学院での『ハンドブック』の具体的な活用方法やその展開、意義が述べられました。そして、冒頭の83号では、新進気鋭の若手研究者から、鮮やかな活用のポイントが寄せられました。

ここでの『音楽教育研究ハンドブック』の活用のポイントは、以下のようにまとめられます。

- 1) 「音楽教育研究」の対象・内容・方法の拡がりや深まりに気づき関心を深める、
- 2) 「音楽教育研究」の研究計画の立て方・研究方法について知り考える、そして
- 3) 「音楽教育研究」の意義と大切さに気づき追究するために、その「ハンドブック」として、またガイドとなりプラットフォームとなる書として縦横無尽の活用の在り方を探ること、などです。

学会設立50年を経て、満を持して生まれた『ハンドブック』。ここには、これまでのわが国の音楽教育研究の叢智が結集され、これからの音楽教育研究の方向性が示されています。

2021年には第2刷も出すことができました。このことをとても嬉しく思いながら、願わくば、大学等の教育研究機関のみならず、音楽教育のさまざまな現場で、そしてまた、音楽教育研究のみならず、幅広い「智」の地平で、この『ハンドブック』が活かされていくことを祈っています。

2 音楽教育の窓

〈連載〉音楽・教育・学校 (28)

1. 学校で日本音楽を学ぶこと―「口唱歌」によせて―

澤田 篤子 (大阪教育大学名誉教授)

2017年告示の中学校学習指導要領に「口唱歌」(以下「唱歌」)が初めて示された。その後、唱歌を用いた学習について実践や研究が積み重ねられていることだろう。

かつて、雅亮会(天王寺楽所)初代楽頭の小野撰龍先生に筆筈のご指導を賜った。初稽古ではまず平調《越天楽》の唱歌を撰龍先生の範唱に倣って歌い、確実に覚えた頃、やっと筆筈を手にすることができた。撰龍先生より雅亮会伝統の書き方をお教えいただきつつ、筆筈譜に記す唱歌の仮名に、唱歌で覚えた音の細かな動きを自身の工夫も加えて線などで表した。日本音楽では声明や能の謡を学ぶのみで初の器楽の体験であったが、器楽でもまず声による唱歌の範唱を聴き取り、息づかいを含めて忠実に模唱し、可視化もしてみることが、その音楽へのさらなる接近につながることを実感した。

この唱歌との出会い以来、勤務校の小学校教員養成課程の教職科目で唱歌を用いて箏や和太鼓の実習、そして音楽づくりなどを行ったが、理科や社会など音楽外の専攻の学生も、五線譜にしばられない活動に積極的に取り組んだ。また附属小学校教員の協力を得て、6学年児童を対象に、《越天楽》をまず「鑑賞」した上、グループで何度も聴取し、指導者が準備した縦書き・横書きの両様で筆筈の唱歌を記した用紙に、音の動きを線や記号等々で自由に記し、唱歌で歌うというグループ学習を試みた。伝統的な筆筈譜は示さなかったが、興味深いことに当初は横書譜だったグループも縦書譜を用いるようになり、また唱歌をより正確に模倣できるようになった。

日本音楽では、曲種・流派で傳承されている型を組み合わせ、あるいは変形し発展させていくという方法で音楽が生み出された。その楽譜も西洋芸術音楽のように追創造を前提としない。つまり、音楽を正確に記述するためのものではなく、規範的、標準的な姿を示し、後の傳承に備えるものだ。したがって、楽譜は学習の場ではあくまでも目安であり、学習者は指導者が実際に奏する音響を聴き取り、器楽の場合であれば唱歌による模唱で内化していく。このことから、長い傳承の過程で、規範を著しく逸脱しない範囲での変形、つまりある種の創造を許容し、音楽は分化・多様化を重ねてきた。ただし、家元制度などの影響もあり、型の模倣が型のコピーに傾斜することも免れ得なかった。

以上の日本音楽がもつ特質の背景には仏教における体(主体・本質)・用(作用・はたらき)の考え方があってはならないだろうか。体・用は世阿弥も『至花道』の「体用事」でも論じているが、音楽の場合であれば、繼承されてきた本質(体)を人が感受し、感受したものをその人なりにはたらかせ(用)、現実に鳴り響かせたものが現実の音楽と捉えることができよう。よって、対象を感受し、それに自身のはたらきかける過程がむしろ重要なのである。

この日本音楽の特質に注視すると、学校教育における学習の姿も見えてくる。たとえば、鑑賞であっても、学習者が自身の感性をもって対象を捉え、一部分でも必ず歌ってみること(器楽であれば唱歌で)、また表現であれば、装飾を加えるなどの工夫や、雅楽の追吹・退吹、地歌箏曲の段合せ・打合せなどの先人の工夫・楽しみ方を唱歌や楽器で体験したり、わらべうたなどで試みたり、さらにはこれらの原理による創作・音楽づくりも可能だ。要はその音楽のありようも含めて学ぶことである。

幼稚園教育要領や保育所保育指針にも「わらべうたや我が国の伝統的な遊び」も示された。保幼から教員養成に至るまで日本音楽へのまなざしがひろがり、深まることを期待している。

3 会員の声

1. インド音楽の教材化に向けて

松下 行馬（神戸市立水木小学校）

4年前から、京都教育大学の田中多佳子先生と共同で、インド音楽の教材化に取り組んでいる。先生と初めて出会ったのは、2018年8月10日に東京で開催された「新しい音楽教育を考える会第12回音楽づくりワークショップ」。それまでも、《かえるの合唱》を班ごとにインド風にアレンジして合奏するという学習を、4年生の3学期に毎年行なってきたので、先生のワークショップ「北インド古典音楽を体験！」の受講後、その旨をお話したところ、「是非授業を観たい」と言われた。

とは言え、「田中先生は学校教育でインド音楽を取り上げることに否定的」という話を耳にしていたため、不安でいっぱいだった。加えて、一般的に研究者は、授業の進め方が「専門的に正しい」かどうかについて手厳しい。しかし、《かえるの合唱》の旋律を、子ども1人1人が、音階構成音の一部を上方（#）、もしくは下方（b）変位させ、それを鍵盤ハーモニカで主音のドローンをつけて演奏している姿を見て、先生は思いがけない感想を述べられた。「インド音楽に聴こえた！」

先生は、それからも継続的に足を運んでくださり、こうすればもっとよくなる、あるいは、ここは専門的にはおかしいのでこう変えるべきだと珠玉のアドバイスをくださった。それを伺っていくうちに、「インド音楽により近付いた授業をしたい」という思いが強くなっていった。

それからしばらくして、田中先生は、動画資料「インド音楽の魅力」をつくり公開された（京都教育大学公式 YouTube kyokyochannel に所収）。驚いたことに、その中には、北インド古典音楽の様式に則った「《かえるの合唱》の変奏」が3パターンも含まれていた。「この動画で、インド音楽の特徴を一度につかむことができる！」これをきっかけに、授業での主活動を、動画と同様、《かえるの合唱》を主題とし、「序奏部—主題提示部—変奏—終結部」の形でのアレンジに刷新した。

ただ、インド音楽の精髓である変奏の即興演奏を取り入れるまでには時間を要した。#やbが混在した音階で、頭の中でフレーズを考え、それを拍の流れにのって演奏することは、子どもにとって大変難しい。それについて相談すると、インドで使われているソルフエージュのような音階練習「アランカール」を教えてくださいました。先生の意図は、恐らく、これを使って子どもたちの即興のヴォキャブラリーを増やすようにしてみたらどうかということだったろう。けれども私はこれから二項係数の規則性を表した「パスカルの三角形」を想起した。「音高の動き方と拍数を一目でわかるようにすれば即興演奏は容易にできる。」そこで、即興演奏を視覚的にサポートする「アランカール三角形」を考案した。これは想像以上の効果を発揮し、子どもは楽譜を介することなく手軽に即興パターンをつくれるようになり、北インド古典音楽の様式に則った「インド風《かえるの合唱》」が音楽室に奏でられるようになった。その成果の一端は、日本音楽教育学会第52回大会において田中先生と千葉大学の本多佐保美先生との共同で発表させていただいた。

一連の過程を通じて、研究者と現場の教師の関係は食材の生産者と料理人に似ていると思った。今年度、先生から「インドのプロの演奏家が歌った、《めだかの学校》の動画を教材として使えますか」と新たな食材の提案をいただき、初めて料理に取り組んでみた。今後も、素材の面白さを生かし切れるような授業をつくっていきたいと思っている。

2. コロナ禍の教員養成課程で気づいたこと

水谷 いつみ（鹿児島国際大学）

日本音楽教育学会に入会してから3年半が経過した。イギリスで修士号を取得後、研究者としての将来が明確に見えておらず、帰国してから数年は足踏みをしている状態であった。そんな中、本学会の全国大会や九州地区例会に参加し、研究に対する様々なパッションやアプローチを持ち、献身的に音楽教育研究に取り組む先生方の姿を拝見し、以来インスピレーションを受け続けている。今も自分自身の研究スタイルを模索中ではあるが、このような助けを受け、少しずつ前進しているつもりである。手前味噌ではあるが、まずは先生方に感謝と敬意を表したい。

私は現在、非常勤として、音楽科の学生に向けた教員免許取得のための講義（音楽科教育法Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ）や教育実習Ⅰ・Ⅱ、教職実践演習（中・高）の講義を担当している。当校の音楽科に入学してくる学生の中には、「音楽の先生になりたい」と思っている学生もいる。また、入学時に教師を志していなくても、卒業後に現場で教鞭をとり活躍している学生もいる。教員養成課程の講義に対する学生のモチベーションは様々であるが、全体に対して言えるのは、場数が足りないということである。その上、2020年に入ってからのというもの、コロナウイルスの感染状況により、大学の授業は影響を受け続けている。全15回中の半数近くがオンライン授業になったり、模擬授業を行う予定であった講義が突然オンライン授業になったりと、学生にとって困難な状況が続いている。しかし、新型コロナウイルスの問題が長期化（常態化）するなかで、気づかされたこともある。

まずは、学生がこの学習スタイルに慣れてきているということである。例えば、2022年1月現在の3年生は、2年生の前期からオンライン授業を経験している。これは彼らの大学生生活の半分以上を占める。はじめの半年は慣れないことばかりでストレスを感じていた学生たちも、今ではオンデマンド式やZoomによる授業、ネット上での課題提出にすっかり慣れている。パソコンやスマートフォン、タブレットを駆使しながら受講したり、Zoomでの授業中に学生に発言を求められても問題なく発言したりしている。次に、学生たちがこの状況に応じて新たな挑戦をしていることである。指導者から対面的な指導を受けられないことで、自ら行動しなければならないことを自覚している学生が多くいる。先日、感染拡大を受けて、対面授業が突然オンライン授業に切り替わったことがあった。その際、模擬授業担当であった学生が、Zoomで模擬授業をすと申し出た。彼はスライドを駆使し、音声や映像、クイズなどを取り入れながら、他の学生に質問を投げかける双方向授業にするなど、素晴らしい模擬授業を行なった。生徒役をしていた学生もそれに対応し、Zoomの音楽授業でできることや改善点を見つけていた。もちろん、対面での実践に勝るものはないが、授業者も生徒役の学生も、この状況のなかでできるベストを尽くしたと感じ、この姿勢こそが今の時世に最も必要なものだと気づかされた。

学生たちは、教員養成課程で様々な技術を学習する。それらは教育現場に立つ先生にとって必要不可欠なものばかりである。しかし、コロナ禍のこの状況だからこそ、学生たちはこれらの技術以外の何かに気づき、工夫し、発展させられる可能性を秘めていると感じた。

4 会員の新刊・近刊等紹介

- ★磯田 三津子 著『**京都市の在日外国人児童生徒教育と多文化共生—在日コリアンの子どもたちをめぐる教育実践—**』明石書店 2021/2/15 A5判・176頁 ISBN: 978-4750351414 [本体3,200円+税]
京都市には、公立小学校の教師で構成される京都市小学校外国人教育研究会（外教研）がある。本書では、外教研が発足した1981年以降の在日コリアンの子どもたちをめぐる京都市の教育実践について論じられている。
- ★板野 晴子 著 *The history of the introduction of Eurhythmics to Japan.* 風間書房 2021/10/29
A5判（英語）・266頁 ISBN: 978-4759923995 [本体7,500円+税]
リトミックは音楽に反応し身体運動をすることで人間の諸機能の発達を促す音楽教育法である。その日本への導入の経緯・人物・実践法・分野等を総括的に捉えた論考の書。（科研費研究課題番号40514980）
- ★磯田 三津子 著／晋平太 協力『**ヒップホップ・ラップの授業づくり—「わたし」と「社会」を表現し伝えるために—**』明石書店 2021/11/20 A5判・160頁 ISBN: 978-4750352893 [本体2,000円+税]
本書は、ラッパーの晋平太へのインタビュー、ラップを教材に社会や自分自身について語るための授業実践案、ヒップホップの教育的意義に関する理論の解説の3部によって構成されている。
- ★野澤 豊一他 編著／井手口 彰典・西島 千尋他 著『**音楽の未明からの思考—ミュージッキングを超えて—**』アルテスパブリッシング 2021/12/22 A5判・312頁 ISBN: 978-4865592474 [本体3,000円+税]
本書は人類学や社会学、音楽学などの研究者16名が、世界各地でのフィールドワークの経験を、あえて「音楽」や「ダンス」を抽出することなく、「ミュージッキング」（Ch. スモール）としてありのままに捉えようとした1冊である。
- ★高橋 憲人 著『**環境が芸術になるとき—肌理の芸術論—**』春秋社 2022/1/31 四六判・240頁 ISBN: 978-4393333884 [本体2,600円+税]
環境、知覚、芸術創造に通底する「肌理」へのアプローチを通して、環境のなかでモノゴトを鋭敏に「知覚する」ことと、それらを素材に新たなモノゴトを「創造する」ことが常に往還を続けるエコロジカルなプロセスを考察する。
- ★瀧川 淳 編著『**1人1台端末でみんなつながる！ 音楽授業のICT活用ハンドブック**』明治図書 2022/2/21 A5判・136頁 ISBN: 978-4183494399 [本体1,960円+税]
本書は、1人1台端末の時代に音楽授業でICT機器を有効に活用できるよう、様々なアプリを使った50のアイデアのほか、授業に役立つ数多くのHPのリンクを紹介し、本書を起点に音楽の世界とつながることを目指している。

5 報告

1. 2021年度 日本音楽教育学会 第4回常任理事会・新旧合同常任理事会

日 時：2022年2月20日（日）14:00～16:00（常任理事会）・16:00～18:00（新旧合同常任理事会）

場 所：オンライン開催（Zoom）

出席者：今川，本多，木村，石上（記録），小川，権藤，齊藤，佐野，嶋田，杉江，水戸
（新旧合同常任理事会）有本，今田，菅（かん），笹野，菅（すが），寺田

今川会長より，第24期最後の常任理事会開催にあたり，新型コロナウイルス感染症に大きく影響を受けた時期にもかかわらず，オンラインを活用した大会，APSMER 2021東京大会，ゼミナール，ワークショップ，地区例会等諸行事の開催，学会誌の発行等，滞りなくすべての学会活動が行われたことに対して謝意が示されるとともに，次期の常任理事会に課題を引き継ぐことが伝えられた。

【会務報告】〈2021年10月15日以降〉（木村）

2021年10月16, 17日 日本音楽教育学会第52回大会（京都教育大学 オンライン開催）

12月18日 ニュースレター第86号発行

12月31日 『音楽教育実践ジャーナル』vol.19発送

2022年2月20日 2021年度第4回常任理事会（Web会議）・第4回編集委員会（Web会議）

【メール審議の報告】〈2021年10月15日以降〉（木村）

- ・「教科教育学コンソーシアム」から，ジャーナル刊行に向けた編集委員会設置と諸規程（編集委員会設置規程，ジャーナル編集規程，研究推進委員会設置規程）が提案されるとともに，第2回シンポジウムについての意見の要請があり，それらについて本学会からの回答案が今川会長から示され，承認された。
- ・本学会から，編集委員を高橋雅子会員（山口大学），研究推進委員を伊藤真会員（広島大学，次期教科教育学コンソーシアム理事〔会長特命〕兼任），小川容子会員（岡山大学）にそれぞれ委嘱したことが報告された。
- ・3月13日開催の教科教育学コンソーシアム第2回シンポジウムへの推薦は三役に一任とし，コンソーシアムからの依頼により，登壇者に笹野恵理子会員（立命館大学）が決定した。

【審議事項】

1. 新入会員及び退会者について（木村）

2021年10月15日以降，正会員新入会13名，再入会希望者1名（理事会にて承認後新入会手続き開始），正会員申出退会9名，正会員申出退会予定者10名があり，承認された。また，2022年5月末に2年未納だった場合，2021年度をもって自然退会となる正会員67名があることが報告された。（2022年2月19日現在 正会員1,589名，学生会員3名，名誉会員2名，特別会員2名）

個人情報保護のため削除しました

正会員新入会13名・正会員再入会1名

2. 2022年度補正予算案にむけて（杉江）

資料に基づき、次年度以降の国際交流に関わる事業の活性化、選挙の電子化等も見据えて、国際交流基金、選挙積立金、研究出版基金・学会基金等の増額、事務局更新に関わる予備費について検討を行った。

3. 第53回大会について

(1) 開催日程および開催方法・会員への周知（木村）

2022年11月5、6日で開催予定。開催方法、発表形態等は実行委員会と学会本部に一任とし、応募要領および学会HPにて周知することが了承された。今期から次期への引継ぎを漏れなく行い、実行委員会と連携して4月以降に準備が円滑に進むようにする。開催方法は遅くとも5月中旬をめぐりに決定したい。オンライン・対面いずれの場合も、発表形態は口頭発表・ポスター発表・共同企画とする方向で実行委員会と相談を進める。

(2) 学会会員の参加費（木村）

昨年同様2日間開催のため正会員4,000円とし、対面開催で当日申込を受け付ける場合は、事前申込4,000円、当日申込4,500円とすることが承認された。

(3) 「大会開催についての学会本部と大会実行委員会との覚え書き」（木村）

大会実行委員会との覚書（2017年2月19日最終改定）を確認し、承認した。

(4) 大会準備日程（木村）

資料に基づき大会準備日程について提案された。開催方法によって大会準備の内容が変わるため、詳細は改めて決定することが了承された。

- (5) 発表応募要領・大会発表に関する内規（木村）
資料に基づき承認した。発表応募要領は3月15日までに作成して例年通り会員に郵送するが、最終版は、開催方法が確定したのちに学会HPで公開する予定。
- (6) 大会参加登録システム（木村）
第53回大会も従来と同様東武トップツアーズに依頼することが了承された。
- (7) 大会実行委員会企画（実行委員会→木村）
池田篤氏らによるジャズのライブ（解説付）および座談会（パネルディスカッション）を予定。

4. 2022年度夏期ゼミナールについて（企画）
次期企画担当理事で検討を行うこととした。

5. 学会賞審査委員会規定について（今川）
第3条の（3）について、委員選出の規定改訂の必要性が説明され、次期に検討課題として引き継ぐこととした。

6. 選挙の電子化について（今川）
検討課題として次期に引き継ぐこととした。

7. 第54回大会候補地について（今川）
北海道・東北地区に依頼中である。

8. 会則および細則中の選挙に関わる箇所の改訂について（嶋田・齊藤）
選挙管理委員会から指摘のあった会則・細則の選挙に関する箇所について、より明確に読み取れるよう改訂が提案され、会則については表に示したように改訂案が了承され、細則については、次期常任理事会・理事会にて引き続き文言を精査し、確定することとした。

- ・「日本音楽教育学会会則」第三章 組織及び運営 第10条（3）
会員→正会員と明記する。

改訂後	改訂前
第三章 組織及び運営 第10条 役員は、正会員の中から次の方法によって選出する。 （3）理事は、各地区において <u>正会員</u> の直接選挙によって選出する。地区および定員については、細則で定める。	第三章 組織及び運営 第10条 役員は、正会員の中から次の方法によって選出する。 （3）理事は、各地区において会員の直接選挙によって選出する。地区および定員については、細則で定める。

- ・「日本音楽教育学会細則」第五章 役員に関する規則 第16条
会長の被選挙権に関して、会員歴の期間、理事経験の時期等の文言を精査・検討する。
[参考] 現行「会長の被選挙権は、連続10年以上の会員歴を有し、理事の経験があり、改選年度の2年前の年度会費納入者が有する。」

【報告事項】

1. 第52回大会（京都教育大学 オンライン開催）について（杉江）

(1) 収支決算報告に基づき、会計報告がされた。

日本音楽教育学会第52回京都大会（オンライン開催） 収支報告

【収入の部】

費目	金額（円）	備考
大会実行委員会経費（学会本部より）	700,000	
広告料	260,000	@40,000×3社+@20,000×7社
臨時会員参加費	299,000	@5,000×39人，@3,000×33人，@1,000×5人
利息	2	
収入合計	1,259,002	

【支出の部】

費目	金額（円）	備考
システム登録料	58,812	@2,700×15台+アップグレード2台+消費税
施設使用料	0	
PCレンタル料	0	
実行委員会企画経費	313,016	講師謝金，映像制作（撮影・編集）費 その他（収録交通費等）
HP作成謝金	100,000	
ICT専門員/オンライン開催業務謝金	30,000	テクニカルサポーター（計10h）
学生アルバイト謝金	193,260	謝金（@1,000×157h），昼食代，交通費
実行委員会経費	20,640	交通費等
消耗品	3,173	スイッチングハブ，封筒等
その他諸経費	64,377	チラシ印刷代，郵送料，手数料等
学会本部への返金	475,724	
支出合計	1,259,002	

上記の通りご報告いたします。

2021年11月27日 会計担当 杉江淑子・豊田典子・劉 麟玉

(印省略)

上記の通り相違ないことを監査いたしました。

2021年12月6日

林 睦

(印省略)

(2) 実行委員会企画の内容（大会で動画配信した部分）について、一定期間を経たのちにYouTubeで公開することが実行委員会から提案され、概ね了承された。学会としてこうしたコンテンツを積極的に公開することは今後重要となるが、現段階では、学会Webサイトの「大会の案内：第52回京都大会のページ」からアクセスできるようにする方向で公開することとする。また、関係者からの許諾、公開期間の設定、管理者や視聴制限など、詳細の確認と検討を行うことになった。

2. APSMER 2021東京大会報告

(1) 最終報告（水戸）

主催団体である日本音楽教育学会のWebサイトにプロシーディングスのPDFを位置付けたいとする提案があり、承認された。

(2) 会計報告（本多）

収支報告に基づき適切に処理された旨、会計監査にて確認されたことが報告された。参加人数が多く、会場費も無料となり、システム担当者はじめ大会実行委員の献身的な働きにより黒字となった。ISMEからの助成金は辞退した。余剰金は国際交流基金に位置付けて有効活用していくことが了承された。

APSMER 2021 東京大会（オンライン開催） 収支報告

【収入の部】

費目	金額（円）	備考
大会参加費	3,262,000	227人
学会からの補助	1,200,000	
銀行利子	9	
収入合計	4,462,009	

【支出の部】

費目	金額（円）	備考
キーノート謝金	200,000	
業者委託費	1,193,900	システム費用
事務補佐謝金, HP構築謝金 Web会議サポート謝金	462,000	
Web会議開催費用	92,548	
ISBNの費用	8,800	
アルバイト謝金	247,000	
当日スタッフ弁当	50,257	
実行委員会経費（交通費等）	115,665	
プロシーディングス編集費	174,983	英文校正費, 編集謝金
その他・雑費	22,469	銀行振込手数料, 文具代, 雑費等
学会本部への返金	1,200,000	
国際交流基金への寄付	694,387	
支出合計	4,462,009	

上記のとおり報告致します。

2022年1月28日 会計担当 本多佐保美・駒久美子

(印省略)

上記のとおり相違ないことを監査致しました。

2022年1月28日 甲斐万里子

(印省略)

3. 2021年度会計中間報告 (杉江)

資料に基づき説明が行われた。

4. 第10回ワークショップについて (石上・佐野)

学会ホームページに申込フォームをアップ、感染予防対策をとって対面で実施する方向で準備を進めている。2月14日現在、尺八体験21名、箏体験8名、聴講9名、計38名申込。参加費入金は1月7日現在で5名。入金の依頼、実施方法等はメールにて周知する。感染症が収まれば尺八の追加募集を行う予定。なお、第2回実行委員会(2/24)において実施方法の再検討をし、現状を踏まえ、参加申込・参加費納入済であれば後日動画限定配信を行うこととする。当日対面での参加が難しい場合でも申込可能。

5. 各委員会等報告

(1) 編集委員会 (小川)

資料に基づき、報告があった。

(2) 広報委員会 (榎藤)

ニュースレター第87号編集作業の進捗状況と3月1日入稿、3月18日発行であることが報告された。

(3) 選挙管理委員会 (高木→木村)

今期業務について、無事に終了した旨、報告があった。

(4) 音楽文献目録委員会 (長野→木村)

音楽文献目録オンラインの遡及入力基金の設置、寄付募集について報告された。母体団体への依頼もある予定とのことで次期に継続検討することとなった。

[新旧合同常任理事会]

ブレイクアウトルームを活用し、新旧常任理事の仕事内容について引継ぎが行われた。

〈次回会議の予定〉 第1回常任理事会 2022年4月23日(土) 13:00～(オンライン)

第1回理事会 2022年4月23日(土) 15:00～(オンライン)

ニュースレターでは「会員の新刊・近刊等紹介」「会員の声」への皆様のご投稿をお待ちしております。書籍、CD、DVDなどのリリースの情報がありましたら、基本的な書籍情報、音源情報に加えて「である調」90字程度の紹介文をお送りください。

投稿先アドレス☞(半角) onkyoiku@remus.dti.ne.jp

...

[第86号のお詫びと訂正]

12月18日発行ニュースレター第86号17ページに掲載された総会資料「2021年事業計画」につきまして、「7月10日 第52期会長・理事選挙開票(事務局)」となっておりますが、正しくは「第25期」となります。お詫びして訂正いたします。

6 事務局より

事務局長 木村 充子

1. 第53回大会について

第53回大会（於：国立音楽大学）は、11月5日（土）、6日（日）の2日間の開催を予定しています。開催方法（対面またはオンライン）、研究発表形態、発表および参加申し込み登録等につきましては、決定次第、学会のWebサイトに掲載いたします。

2. 年度会費納入のお願い

2022年度会費は7,000円です。4月1日以降5月31日までに納入してください。5月31日までに会費を納めなければ、その後の送付物、研究発表や論文投稿に支障が出る場合があります。2年間会費を滞納すると自然退会となりますのでご注意ください。大会での発表を予定されている方は2022年度までの会費を5月末日までに納入する必要があります。入会して発表することを希望される方は5月末日までに入会申し込みと会費納入を完了してから発表申し込みをしてください。会費納入後、約2週間で事務局より年会費振り込みの確認メールが自動送信されます。メールが届かない場合は事務局までEメールにてご連絡ください。

3. 会員情報（所属先・住所など）の変更について

所属先・住所等に変更があった場合は、速やかに修正登録をお願いします。会員情報の変更は事務局では受け付けておりません。学会HP「会員個人専用ページ（「マイページ」）」からご自身で変更していただきますようお願いいたします。メールアドレスが未登録の方は「マイページ」に入ることができませんので、事務局まで至急メールアドレスをご連絡ください。

4. 事務局について

新型コロナウイルスの影響拡大に鑑み、ご用件はEメールでのみ承っております。ただし、お返事までに数日かかることがあります。ご了承ください。

【編集後記】

榎藤広報委員会委員長のもと、1期（2年間）の委員会が終わろうとしています。この2年間はコロナ禍の中で、ニュースレターを介して情報を少しでも多く発信し会員の皆様と共有したいという思いでした。皆様から寄せられましたコロナ禍での様々な対応や実践等の報告に励まされ、ニュースレターをまとめることができました。本当にありがとうございました。また今年度はWeb版会員用ニュースレターをスタートした年でもありました。これからもより良い学会の広報のためにできることを考えていきたいと思っております。引き続きどうぞよろしくお願いいたします。（早川 倫子）

【日本音楽教育学会事務局】

所在地：〒184-0004 東京都小金井市本町 5-38-10-206 Tel. & Fax. : 042-381-3562

E-mail : (半角) onkyoiku@remus.dti.ne.jp

私書箱：〒184-8799 東京都小金井郵便局私書箱 26 *郵便物は私書箱へ

郵便振替口座：00110-6-79672

事務局員：宇田川・亀山・徳山・若尾

※新型コロナウイルスの影響拡大に鑑み事務局開局の状況が不規則となることがあります。ご用件はEメールにてお願いいたします。